

(昭和四七年)のことだった。

懸命の修行で腕を上げた山本は、由緒ある「ヴィダル・サスーン・カットコンテスト」の常連入賞者となっていく。帰国は一九七四年(昭和四九年)。帰国後は美容室経営とともにソーラーカー・レースにも情熱を注ぎ、一九九三年(平成五年)には秋田県大潟村に世界ソーラーカー・レースを誘致する。足利工業大学の牛山泉教室も参加、風車博士として知られる牛山の知己を得た。

もうひとつ、ソーラーカーにまつわる山本の快挙がある。二〇〇一年(平成一三年)、山本チームのマシン「ジョナサン号」はユーラシア大陸横断に挑んだ。ウラジオストクからサングクトペテルブルクまでの約一万一〇〇〇キロを、一ヶ月で走破するという計画だった。

計画案を手にもスクワに乗り込み、政府筋と交渉するがどうしても許可が出ない。帰国まであと二日となったとき、山本はこの計画をほぼ諦め、モスクワの美容院を見学した。

「ある店のオーナーの女性に名刺代わりに持参したヘアカットの英文小冊子を差し出すと、彼女はめざとく、僕がヴィダル・サスーンコンテストの入賞者であることを見つけ、即席の講習会を開いてくれと頼んできました」

そうこうするうちに、テレビ局の女性レポーターが現れ、自分の髪をカットしてくれと申し出る。その申し出を受け、カットしている合間に彼女の山本への取材が続いた。「ソー

ラーカーでシベリア横断を計画したんだが、政府の許可が出ない」との山本の声を、女性レポーターはさっそく、テレビで紹介、事態は急展開し、特別通行許可証が山本に交付された。「この年夏、無事、一万一〇〇〇キロを走破できました」(山本)。

先人の遺産

ソーラーカーにのめり込んでいた山本が、風(風車)に思いが至るようになったのは今から数年前だ。「私の運動、興味はソーラーカー、太陽光発電で始まったが、費用対効果を考えると、太陽光より風車だという思いになった」と山本。風をめぐる先人たちの労苦の歴史を知ったのもきっかけのひとつだったという。

秋田県能代市の日本海沿岸には幅一キロ、長さ一四キロにわたり、黒松七〇〇万本という日本最大級の松林、防砂林がある。「風の松原」と呼ばれ、日本五大松原に数えられるこの松林を造り上げたのは、栗田定之丞(くりたさだのしょうじょう)(一七六七―一八二七年・明和四―文政一〇年)に代表される先人たちの献身的な努力だった。

栗田は江戸後期の林業家で、秋田藩士高橋家に生まれ、一七八三年(天明三年)栗田家の養子となった。一七九七年(寛政九年)林取立役、砂留役などを命じられる。冬から春、日本海から吹き付ける強風は海岸の砂を飛ばし、田畑やときには家までも埋めてしまう。風は